

巻 頭 言

東北数学教育学会の会員数，年会発表件数が最近増加傾向にあることは，お互いに大変喜ばしいことです。このような数量的拡大は，学会として最も重要な人的な拡大に合わせて，財政的な面での拡大と安定に繋がる点でも重要なのです。今日的具体的，理論的課題に対処するために学会や研究会が次々に設立され，会員数の減少が既存の学会の深刻な問題となっているにもかかわらず，この拡大は私達東北地方に住む者にとって有難いことです。

学会の数量的拡大が質的な一層の拡充を引き起こすことが期待されます。それぞれの実践・研究者は一定校種や一定範囲の実践・研究領域をある期間には所有しているのが当然であって，むしろ数学教育の全領域を完全に覆うことが可能だと言う研究者が今日おいでになったら私はその人を信用しないでしょう。ですから，学会が，特定の運動の団体でないとすれば，ある程度以上の数の実践・研究者が集まっていることは，多様な研究情報が相互に流れ，学会を魅力があり，有益なものとするために必要なのです。

しかし，質的拡充が数量的拡大に伴って自然に生じると考えるのは正しくありません。質的拡充にはかなりの意識や努力が必要であることは言うに及びません。私達は数学教育研究の質に常に関心を持って研究を行うべきであるのです。数学教育の研究とは一体何だと考えるのか，何をもちって研究の質の高さと捉えているのかが理解できるようなかたちで研究成果を公表，提示し，討論したいものです。

我が国の数学教育研究の発展に対して東北地方に在住した，在住する研究者の果たした役割，特に質的向上に果たした役割，影響や衝撃は，広島を中心とする西の研究者集団に決して劣らない，むしろ日本数学教育学会が数学教育学論究の発行を開始した以降の，この30年間でみれば，凌駕していたと考えます。このような数学教育に対する貢献は，数学教育研究というものに対する伝統的な考え方に追随するのではなく，日本や世界に発信できる研究内容・方法を編み出そうとした意欲と努力によって遂行されたものであることは間違いありません。

東北数学教育学会と併行的に東北・北陸数学教育基礎的研究会が存在し，最近は年二回の研究会のうち一回を当学会の年会と重ねて開催しています。両者は対立するどころか相互補完的であったので困ることは全く有りませんでした。会発足に直接関わらない会員の方が多くなり，その経緯を知る者は少なくなって来た現時点において両者の関係を明確化し，整理することが求められているのではないのでしょうか。

秋田大学・教育学部 湊 三 郎